

菅原道真「雨夜」について

——『菅家後集』の悲憤——

緒言

菅原道真の詩「雨夜」(『菅家後集』^①)は困窮する「遷客」のこみ上げる悲憤を遣る方なく書きつけた詩である。寄り添う人々を失い「詩友独留真死友(詩友は独り留る 真の死友)」(「詠楽天北窓三友詩」『菅家後集』)とまで記した晩年の道真にとつて「理知」^②は「激情」を言葉に整齊して「悲惨な運命」を容易に対象化しえたのであろうか。本稿では文人の嗜み、詩の一点景としての茶の来歴を俯瞰しつつ、それと交叉する大宰府に貶斥された道真の内心の形象を「雨夜」の表現に見出したい。

一

日本と東アジアとの交易、平安初期の飲茶の例を挙げると、嵯峨帝と最澄との関わりとして『文華秀麗集』^③巻中 嵯峨天皇「答澄公奉献詩。一首」に「山精供茶杯(山精茶杯を供ふ)」とある。一方、遣唐使とは別に新羅との民間交易が盛んになるのが『続日本後紀』承和9年(842年)頃からとされる。^④佐伯は

多くの人々が外国商品を手にし、来航船が姿をみせる土地では、役人から民衆にいたるまで新羅商人と接していた。こうした光景は、それまでの日本にはみられないことであった。しかも、彼らが希求した物品は、文化の粋をこらした芸術品ではなく、実用品であった。茶・人参・薬品・香料・陶器・繊維・毛皮類といった商品が例としてあげられるだろう。

と述べている。「茶・人参・薬品・香料・陶器・繊維・毛皮類」といった商品については『続日本後紀』^⑤承和9年前後の記事にはなく未確認であるが、佐伯が指摘する

渡辺仁史

ように当時、正式な遣唐使に頼らなくてもよいほどに文物が流通するようになっていた可能性はある。『続日本後紀』承和6年10月の条に「遣唐大使已下朝拜」の記事があり、「奉唐物於伊勢大神宮」の他に「建礼門前張立三幄。雜置唐物。内蔵寮官人及内侍等交易、名曰宮市」とも記されている一方、新羅船の来航も多かったようで、入国禁止を訴える「藤原朝臣衛上奏四條起請」が『続日本後紀』承和9年8月の条に見える。

自ら深く関与した寛平6年(894年)の遣唐使停止の後になるが、菅原道真(845—903年)『菅家後集』「題竹床子 通事李彦環所送」(902年か。)にも李彦環から「不費一錢得唐物(一錢を費さずして 唐物を得たり)」とある。川口久雄に即すると『日本三代実録』^⑥貞観4年(862年)7月の条の「大唐商人李延孝等」が来て「勅大宰府。安置供給。」となった例があり(李延孝等は貞観7年7月にも「来著海岸是日。勅安置鴻臚館。随例供給。」とある。)、李彦環も「こうした唐商の類」であろうかとしている。ちなみに『寛平御遺誠』^⑦(897年)に「外蕃の人必ずしも召し見るべき者は、簾中にありて見よ。直に対ふべからざらくのみ。李環、朕すでに失てり。新君慎め。」とあり、『日本紀略』^⑧寛平8年(896年)3月の条に「唐人梨懷依召入京」とある。「梨懷」は「李環」と考えられるという説^⑨があり、「李彦環」の「彦」を宇多天皇『寛平御遺誠』では当然書かれない敬称と解釈するのは「通事」の身分からすると難しい。「李環」と「李彦環」とは何らかの関係があるかもしれない。少なくとも唐人の来航が増加しているのは確認できる。^⑩道真の詩「題竹床子」の前に位置する「雨夜」に「茶」の語があるが、このような動向が関連す

るのかもしれない。

二

菅原道真が九州大宰府での詩「雨夜」〔菅家後集〕で「起飲茶一盞（起きて茶一盞を飲む）」（道真は酒が苦手であるがこの時は「酒半盞」を傾けた。）のおそらく902年であろう。この時期、都良香（834—879年）『都氏文集』卷第三「白楽天讚」（白居易は茶と酒を好んだとある。）、同じく「銚子廻文銘」に「多煮茶若来如何 和調体内 散悶除痾（多く茶茗を煮、飲み来るは 如何。体内を和調し、悶を散じ痾を除く。）」とあり茶を煮ること、薬用であることが示される。また、島田忠臣（828—892年？）『田氏家集』卷之下「乞滋十三摘茶」、『菅家文章』卷第四「八月十五夜夜、思旧有感」（茗葉香湯免飲酒（茗葉の香湯をもて 飲酒を免る）」と酒が苦手であることを述べている。）、『菅家文章』卷第五「仮中書懷詩」（「悶飲一杯茶（悶ゆるとき 一杯の茶飲む）」）にも飲茶の例がある。平安時代においても茶はいわゆる庶民ではない一部の階層、地域（主に京、大宰府とその周辺。これらの地域は文物の交流の拠点である。）で飲まれ続けたようである。初めて輸入された頃と異なり、天皇家・上級貴族・僧侶のみとは限らない。菅原道真はおくとしても島田忠臣、都良香は明らかに上級貴族ではない。むしろ茶は平安初期から文人に好まれたと理解する方がよいのであろう。その場合、時代とともに文人の地位が下がり続けていることも考慮する必要がある。また、藤原佐世（？—898年）『日本国見在書目録』⁽¹⁶⁾（寛平年間889—898年成立か。）にはいまだ陸羽『茶経』の記載もない。前述の「題落星寺」（成立時期については1080年、1102年の両説がある。）の「煮茶」の語からも、日宋で年代は相違するがこれらの「茶」は後世の抹茶ではないであろう。

大陸との交易で賑わいはするが京からすれば僻遠の地である大宰府、そこからさおおよそ疎外された老病の身のこととして「雨夜」は綴られている。「心寒雨又寒」を「暗く陰惨に流れようとする気分を、六句目の「心寒ければ雨もまた寒し」とい

う美しい表現が救っている。」と説明するのは「遷客甚煩懣 煩懣結胸腸（遷客甚だ煩懣す 煩懣胸腸に結ばほり）」と反復される「煩懣」、身体感覚を言葉に具体化できないほどの憤りを理解することができない。ここは「春雨」の「暖」、「春夜」漏非長（漏 長きに非ず）」と対比的に、「心寒雨又寒 不眠夜不短（心寒くして雨又寒く 眠らずして 夜短からず）」（柳澤良一訓読）と「寒」が曇みかけられるのを孤絶の強調として捉え、また「不眠」、「夜不短」の痛苦が対時的に表現されていると読むべきであろう。そうでなければ後世、畏怖されることになる天神への信仰の素地となる痛憤を見落としてしまう恐れがある。

「雨夜」の詩句「屋漏無蓋板（屋さへ漏れて 蓋はむ板ぞ無き）」の「屋漏」について柳澤良一は二説の内「室の西北隅」ではなく「屋根の雨漏り」説の根拠として『世説新語』の例を挙げているが、より近く杜甫「茅屋爲秋風所破歌」にも「床頭（あるいは「床床」）屋漏無乾處（床頭は屋漏れて乾く処無く）」とある。この詩は「安得広厦千万間 大庇天下寒士俱歡顔（安くんぞ広厦の千万間なるを得て 大いに天下の寒士を庇いて俱に飲ばしき顔せん）」で知られている。「雨夜」との影響関係は不明であるが、良吏としての理念の類型かもしれない。なお、杜甫のこの詩の「寒士」が一般民衆を指しているわけではないという説に対して黒川は杜甫の詩「自京赴奉先縣詠懷五百字」を根拠に反論している。杜甫とは政治的地位が格段に異なり右大臣だった道真ではあるが、「農夫」に言及する道真にかつての「寒早十首」〔菅家文章』卷第三〕の詩群の感慨を重ねることも不可能ではない。

失意の中にあつても誰にも心穏やかな日が訪れることがある。しかし、通底する憤怒が払拭され得るかは別である。道真の心中はもはやかつてのように「悶飲一杯茶」では収まらない。病患と空腹と雨漏りのする粗末な「茅屋」（「風雨」〔菅家後集〕に耐え、茶でも温石でも心癒やされず、飲めない酒を無理に口にすると道真の脳裏には『史記』「伯夷列伝」⁽¹⁷⁾の「儻所謂天道是邪非邪。（儻いは所謂天道はか非か。）」という司馬遷の痛切な問いが去来していたのかもしれない。かつて道真は「天道人心 髪不容（天道と人心と 髪も容れず）」（「九日侍宴 群臣獻壽、應制」〔菅家文章』卷第五）と詩に記した。しかし、「雨夜」の結びの「天道之運人 不一其平坦（天道の人を運すこと 一に其れ平坦ならず）」は「運命在皇天（運命 皇天に在り）」（叙

意「百韻」「菅家後集」とともに決して天人相関説にかなう調和的な認識ではない。「天道」は「平坦」、すなわち平等ではないと道真は憤る。文人のおおよそは事務を処理する中下級官吏で終わるが、道真は例外的に政務を掌る立場に至った。そのことを勘案する限り、かつての右大臣が現在は「遷客」であることの大きな落差、それに伴う傷ついた矜持と悲憤慷慨とを忘失してはならない。

結語

生身の人間であることを強く意識する道真の煩悶、懊悩はひとり「冥々理欲訴冥々（冥々の理は冥々に訴へまく欲りす）」（「燈滅二絶」「菅家後集」という絶望に至らざるを得ない。『菅家後集』は仏菩薩への祈りを伴う望郷の念をわずかに書きとどめ閉じられている。

注

- (1) 川口久雄校注 日本古典文学大系『菅家文草 菅家後集』岩波書店 昭和41・10 なお、道真詩の訓読は主として本書による。
- (2) 藤原克己『菅原道真 詩人の運命』ウェッジ 平成14・9
- (3) 古藤真平「茶」角田文衛監修『平安時代史事典』角川書店 平成6・10の指摘による。小島憲之校注 日本古典文学大系『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店 昭和39・6
- (4) 佐伯有清『最後の遣唐使』講談社学術文庫 平成19・11
- (5) 『続日本後紀』吉川弘文館 昭和51・11
- (6) 『日本三代実録』前篇 吉川弘文館 昭和52・6
- (7) 大曾根章介他校注「寛平御遺誠」日本思想大系『古代政治社会思想』岩波書店 昭和54・3
- (8) 『日本紀略』前篇 吉川弘文館 昭和4・8
- (9) 滝川幸司『菅原道真 学者政治家の栄光と没落』中公新書 令和1・9
- (10) 考古学的発掘で九世紀、越州青磁が九州、京都伏見で出土している。三杉隆敏『やきもの文化史』岩波新書 平成1・8 の指摘による。
- (11) 前掲の古藤真平「茶」の指摘による。『菅家後集』については柳澤良一編著『菅家後集の研究』汲古書院 令和4・12 参照。

- (12) 中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釋』汲古書院 昭和63・12
- (13) 小島憲之監修『田氏家集注』卷之下 和泉書院 平成6・2
- (14) 前掲の古藤真平「茶」の指摘による。

(15) 仏事に関しては源高明(914—982年)『西宮記』「季御読経事」(八条忠基『有職故実から学ぶ年中行事百科』「季御読経」淡交社 令和4・2に説明がある。)(新訂増補故実叢書『西宮記』明治図書出版 昭和30・12)では応和4年(964年)、天禄4年(973年)に「引茶」の例がある。また『本朝文粹』(大曾根章介、金原理、後藤昭雄校注 新日本古典文学大系『本朝文粹』岩波書店 平成4・5)卷第十 慶滋保胤(?—1002年)の詩序「晚秋過參州薬王寺有感」に「有茶園、有菜圃」とあり、寺院での茶の栽培の徴証が確認できる。(前掲の古藤真平「茶」の指摘による。)宮廷においても『西宮記』には「造茶使」のことが見え、藤原行成(972—1027年)『権記』(増補史料大成『権記』一 臨川書店 昭和40・9)長徳元年(995年)十月の条にも「造茶所」の記事がある。(村井康彦『茶の文化史』岩波新書 昭和54・6 の指摘による。)ただし、前述のような交易を考慮するならば茶が日本産のものか交易によるものかは判別しにくい。併せて大江匡房(1041—1111年)『江家次第』(1111年)(新訂増補故実叢書『江家次第』明治図書出版 昭和28・8)「季御読経事」に(據版本補)(中略)貞観御時每季行之元慶天皇踐祚之後、二季修之」とある。これにより季御読経が二月、八月の二季となったのは陽成朝(元慶)以降と考えられる。

藤原明衡(989?—1066年)「新猿楽記」に「唐物」の一つとして「瑠璃壺」などとともに「藤茶碗」が記されるのが1060年前後と推測される。「藤茶碗」を「とうちやわん」とする大曾根章介校注「新猿楽記」(前掲日本思想大系『古代政治社会思想』)の補注に「青色の絵具で藤などを描いた茶碗。青磁。」とあるがその根拠は不明である。前掲村井康彦著書の「山茶碗」に係するかもしれない。重松明久校注「新猿楽記」古典文庫「新猿楽記 雲州消息」現代思潮社 昭和57・4 は本文を「藤、茶碗」とし、「藤」を「籐」と解して「籐のこと。熱帯アジア原産のヤシ科のつる性植物。茎は強じんて家具などを作り、皮で細工物をつくる。」と注を付す。(傍証であるが柳澤良一は川口久雄説を継承し前掲道真詩「題竹床子 通事李彦環所送」の「床」

は「籐椅子・安楽椅子」とする。こうした物品が当時流通していた可能性がある。(前後には二文字だけでなく三文字、一文字の文物も列挙されているので「茶碗」も含めて不自然な点はない。「茶碗」が上記の青磁を想定している可能性もある。ちなみに宋代の黄庭堅の詩「題落星寺」に「處處煮茶藤一枝(処処茶を煮て藤一枝あり)」小川環樹編訳『宋詩選』ちくま学芸文庫 令和3・5 とあり「藤の杖」と訳されている。一方、荒井健注 中国詩人選集二集7『黄庭堅』岩波書店 昭和38・4 には「一枝の藤が花さく」と訳し、両者とも「藤一枝」の解釈が複数あることを注している。小川環樹前掲書はこの時の「題落星寺」連作第一首にも「更に瘦藤を借りて上方を尋ねん」とあるのは明らかに杖の意である」としている。「藤」「茶」の二文字が隣接するのは「藤」と「茶」との取り合わせについて日宋の寺院等で共通の認識が当時あったからかもしれない。

(16) 小長谷惠吉『日本国見在書目録解説稿』小宮山出版 昭和31・12

(17) 金原理「菅原道真の漢詩―『菅家後集』所載詩を中心に―」太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』上巻 吉川弘文館 昭和50・

3

(18) 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』二 講談社学術文庫 平成28・

7 黒川洋一 鑑賞中国の古典第17巻『杜甫』角川書店 昭和62・12

(19) 司馬遷『史記』「伯夷列伝第一」 水沢利忠 新釈漢文大系『史記』八(列伝一) 明治書院 平成2・2

(20) 岡崎文夫『司馬遷』研文社 平成18・12 初版昭和22・11

(二〇二三年九月二十七日受理)